

## 第4話 応仁の乱

幕府の威信が失せて、権臣の跋扈を制することが出来なくなったので、  
 彼等同士のあいだの反目、確執が烈しくなり、それに将軍家及び管領家の家督争い  
 が絡んで、ついに応仁の大乱となる。

そもそも応仁の乱とは何か？ その原因は何か？

### 応仁の乱の原因

6代将軍義政に至って、室町幕府の威信が殆どまったく失われたことは、既に前話に述べたところで  
 すが、こうして上に立つ者の威令が行われなくなると、勢力のある部下の者らの間で、互いに一層大き  
 な権力を得ようとする争いの起こるのは自然の数です。応仁の乱は、当時最も権力のあった管領細川  
 勝元と山名宗全との間におけるこの権力の争いが主要な原因となって起こったのですが、しかしこれがい  
 よいよ乱となって勃発するまでには、他になお複雑なさまざまな副因がありました。とりわけ直接の導因  
 となったものは、管領家および将軍家の家督争いです。

### 畠山氏の家督争い

前にも述べたように、室町幕府には三管領および四職とって、特に勢力のある家があったが、この  
 管領家の1家である畠山氏に先づ家督の争いが起こりました。初め、畠山持国は、嫡子の子が無かつ  
 たので、庶子（正妻ではない女・妾の生んだ子）の義就に後を嗣がせることにして、1人の家来にこの守役  
 を命じた。ところが、この守役が次第に勢力を得るようになるのを見て、以前からの家老どもはこれを喜  
 ばなかった。彼等は、義就が庶子であるのを口実としてこれを廃して、持国の弟の畠山持富の子の政長を  
 迎えてこれを奉じることにした。主人の定めた主家の家督を、家老どもが不服をいって取り替えようとす  
 るのは、可笑しい話ですが、これもまた当時の風であった下克上の現われの1つであると見ます。畠山氏  
 はこれから2派に分かれて、義就党と、政長党とは互いに勢力を張って、相続を争い、しばしば鬭争にも  
 およんだのです。

### 斯波氏の家督争い

ついでまた管領家の斯波氏にも家督の争いが起きました。初め、斯波義健が死んで嗣子がなかったの  
 で、家臣らは一族の義敏を迎えて嗣とした。ところが義敏は権力のある老臣と争い、機会があればその  
 老臣の領地を奪おうとしていた。たまたま幕府の命を奉じて関東の争乱を鎮めに京都を出発した時、俄か  
 に途中から兵を転じて、その老臣の越前に在る領地に向かい、大兵を以ってこれを攻めた。しかも、却  
 て大いに敗れて退くと、朝敵を外にして私闘を事としたとの廉で、将軍義政の怒りを買って、ついに遠く周  
 防の山口に走って大内氏に頼った。

それで幕府は、武州蕨の城主渋川義鏡の子の義廉に命じて斯波氏を継がせたが、その後、義政は義敏  
 を赦して京都に帰らせたので、ここに斯波氏もまた義廉と義敏との2家に別れて相続を争い、家臣もまた2

## 第4話 応仁の乱

派に分かれて、しばしば相闘争するようなことになったのです。

しかも、これらの争いはいつも、その一方を細川勝元が後援すれば、他方を山名宗全が支持するといいう風で、2人の反目はますますその度を加えていた。そういうところに、さらに一層強く真正面から2人を争わせるような事が起こって来た。それは將軍家の家督争いです。

### 將軍家の家督争い

時は第103代後土御門天皇の寛正5年12月の事です。義政は將軍になってから既に15年経って、年も30才になったが、まだ子が無かったので、坊さんになっていた弟の義尋を呼んで、後継ぎになってくれと頼んだ。ところが、義尋は、「兄上はまだお若いから、他日、子供が出来ないとも限らない。そうすると自然、争いのもとになるから」と言って断った、

### 足利義視

すると義政は、「いやいや、その心配は無用にせい。たとえ後で子供が出来ても、それは必ず赤児のうちから出家させるから、大丈夫だ。ぜひとも後継ぎになってくれ」と、固く約束して頼んだ。義尋も、それならばと、やっとな承諾して、還俗して名を足利義視と改めた。そして、その頃に最も勢力のあった細川勝元を義視の執事とした。この時、義視は26才でした。

### 義政の夫人日野富子が義尚を生む

ところが、それから満1年にもならない翌寛正6年の11月に、義政の夫人日野富子が男の子を生んだ。名を足利義尚とつけた。約束によれば、当然この子はすぐに出家させるべき筈でしたが、夫人富子が、折角の子を坊さんなどにはしたくなかったのは言うまでも無い事だったろうし、義政自身もまた、こうして自分の子が生まれて見れば、恐らくは義視との約束を後悔して、出来るものなら自分の子を將軍の跡継ぎにしたいと思ったでしょう。それが普通の人情です。

けれども、すでに義視との間に固い約束があるので、義尚を立てるためには、先づその始末をつけなければならぬ。しかも義視のほうには、細川勝元という有力な執事がついてる。いったい、これはどうしたらよいでしょう？

### 山名宗全

富子はさまざまに考えめぐんだ末に、何かよい思案はないものかと、当時、勝元に対抗するに足る勢力にあった山名宗全に相談した。宗全はもと持豊といった人で、嘉吉の乱に赤松氏を滅ぼしてのので大いに勢力を得て、その後、髪を剃って名を宗全と改めたのです。細川氏が三管領の1家であるのに対して、山名氏は四職の1家でした。

山名宗全は、富子から相談を受けると、自分の娘は細川勝元の妻になっていて、自分と勝元とは舅と婿との親しい間柄であったにもかかわらず、常に勝元の勢いのよいのを嫉んでいたので、快くその相談に乗って、義視や勝元をしりぞけて、義尚を將軍に立てようと決心した。というのは、もしも義視が、義政

#### 第4話 応仁の乱

やくそくどお かつもと あき よしひさ  
との約束通りに次の将軍になったならば、勝元の勢いがますます強くなるのが明らかでしたが、もし義尚を  
やまな ひと はんじょう かんが  
自分の力で将軍に立てることが出来れば、山名の家こそ独り大いに繁盛することになると考えたからです。

#### はたけやまよしなり 畠山義就

そこで山名宗全は、そのころ将軍義政の怒りを買った上に、畠山政長との闘争に敗れて遠く大和の北山  
しょう はたけやまよしなり よしまさ ゆる こ よしひさ  
の荘に逃げている畠山義就を自分の身方にしようと、義政に彼の赦しを請うて京都に帰らせた。義尚が  
おりがら まさなが かんれい  
生まれて次の11月の事です。折柄、畠山政長は管領をつとめていたが、もとよりこれを喜ばなかったの  
まさなが そうぜん たいこう かつもと むす  
で、政長はますます強く、宗全と対抗している勝元と結んだ。

#### はたけやままさなが 畠山政長

ところが、山名宗全は、すでに将軍を自分の心のままに動かすことが出来るようになっていたので、一  
ぶえんりよ ふるま ほんてい まさなが さ  
層無遠慮に振舞った。彼はその翌応仁元年（西暦1469年）正月、畠山氏の本邸から政長らを去らせて、あ  
よしなり まさなが ようきゆう おう はたけやまよしなり し  
とへ義就を入れようとした。けれども、政長がその要求に応じようとしないと見ると、畠山義就、斯  
ばよしかどい かいちみ しょうしやう ひき せま まさなが よしなり かつもと まさなが たす  
波義廉以下一味の諸将を率いて幕府に迫り、政長が義就を本邸に入れないのは、細川勝元が畠山政長を援  
かつもと うった  
けているからであるという、勝元を訴えた。

#### ほそかわかつもと 細川勝元

よしまさ そうぜん こ い かつもと さと かつもと  
義政は、山名宗全の言うがままにその請いを容れて、細川勝元に手を引くように諭して見たが、勝元は、  
そうぜん よしなり はな まさなが かる こた  
「宗全が畠山義就から離れたら、わたくしも畠山政長から離れましょう」と、あっさり軽く答えただけで、  
まさなが とも へい あつ やしき まも よしまさ しょうしやう たが たい  
彼もまた畠山政長と共に兵を集めて、その邸を守った。義政はこれを見ると、こうして諸将が互いに対  
こう つづ てんか たいらん おそ めいれい くだ  
抗を続けていたら、やがては天下の大乱ともなるうかと恐れしたので、ついに諸将に命令を下してこう言った。  
まさなが よしなり てへい も しょうはい けつ たす  
「畠山政長と畠山義就とは、おのおのその手兵を以って勝敗を決するがよい。諸将はこれを助けてはな  
らない」と。

#### ごりょうばやし たたか 御霊林の戦い

そこで、戦いは2人の間に開かれた。処は上京区の御霊林でした。政長が先づ陣を布いて、義  
ひら ところ かみぎょうく ごりょうばやし まさなが ま じん し よし  
就がこれを攻めたのですが、早朝から始まった戦いはその夜に入って、全く政長の敗北となって終わった。  
なり せ そうちやう まさなが はいぼく  
というのは、午後になって勝敗が決しないのを見ると、山名宗全は部下および斯波義廉らに密かに畠山義就  
ごご しょうはい けつ み しょうぜん ぶか し ばよしかど ひそ よしなり  
を援けさせたのに対して、細川勝元は将軍の命を重んじて畠山政長を援けなかったからです。応仁元年正  
たす かつもと めい おも まさなが たす  
月18日の事で、爾来11年にわたった応仁の大乱の幕がこうしてここに切って落とされたのでした。

#### しょうぜん ぼうじゃく ぶじん 山名宗全の傍若無人

さて、敗れた畠山政長が行方不明となって、この1日の戦いが終わると、世人は勝元が政長を見殺しに  
まさなが ゆくえふめい せじん かつもと まさなが みごろ  
したとその無情を責めて嘲ったり、あるいは、将軍の命を守って中立の態度を執ったその厳正を褒めたり  
むじやう せ あざげ めい まも ちゅうりつ たいど と げんせい ほ  
りしたが、勝元自身は何事も言わずに、ただ黙って次の機会を待っていた。しかし一方、山名宗全、畠山  
かつもと なにごと だま つぎ きかい ま しょうぜん  
義就の一党は、勝利を占めた勢いに乗じて、ますます傍若無人となり、今は細川勝元などは眼中に無い  
よしなり し いきお じやう ぼうじゃく ぶじん かつもと がんちゆう

#### 第4話 応仁の乱

かの如くに振舞ったのみならず、ついには幕府を説いて、勝元の領国をことごとく召し上げようとした。

#### 細川勝元も山名宗全も兵を集める

さすがに隠忍していた細川勝元も、そうまでされては、もはや名分のためになどぐずぐずしてはおられなかった。彼は正当防衛のために、その領国の兵を募り、その一党もまた各自の領国の兵を集めた。すると、これに対して、山名宗全およびその一党も、また各自の領国の兵を招いたので、出世を望む諸国の武士は、戦後の恩賞を夢みながら、続々と京都に上って来た。

#### 細川方の兵は十六万

今、両軍の兵数を挙げて見ると、細川方は、勝元の領国である摂津、丹波、土佐、讃岐の兵60,000を始めとして、同族成之の阿波、三河の兵8,000、同勝久の備中の兵4,000、同成春の淡路の兵3,000、同政有の和泉の兵2,000、同教春の丹波の兵2,000、同道賢の讃岐の兵2,000、斯波義敏の越前の兵500、畠山政長の紀伊、河内、越中の兵500、京極持清の出雲、飛騨、近江の兵10,000、赤松政則の播磨、備前、美作の兵500、富樫政親の加賀の兵500、武田国信の安芸、若狭の兵3,000、および同心の輩60,000人を加えて、合計凡そ160,000の外に、安芸の毛利豊元、吉川経元らがその身方でした。

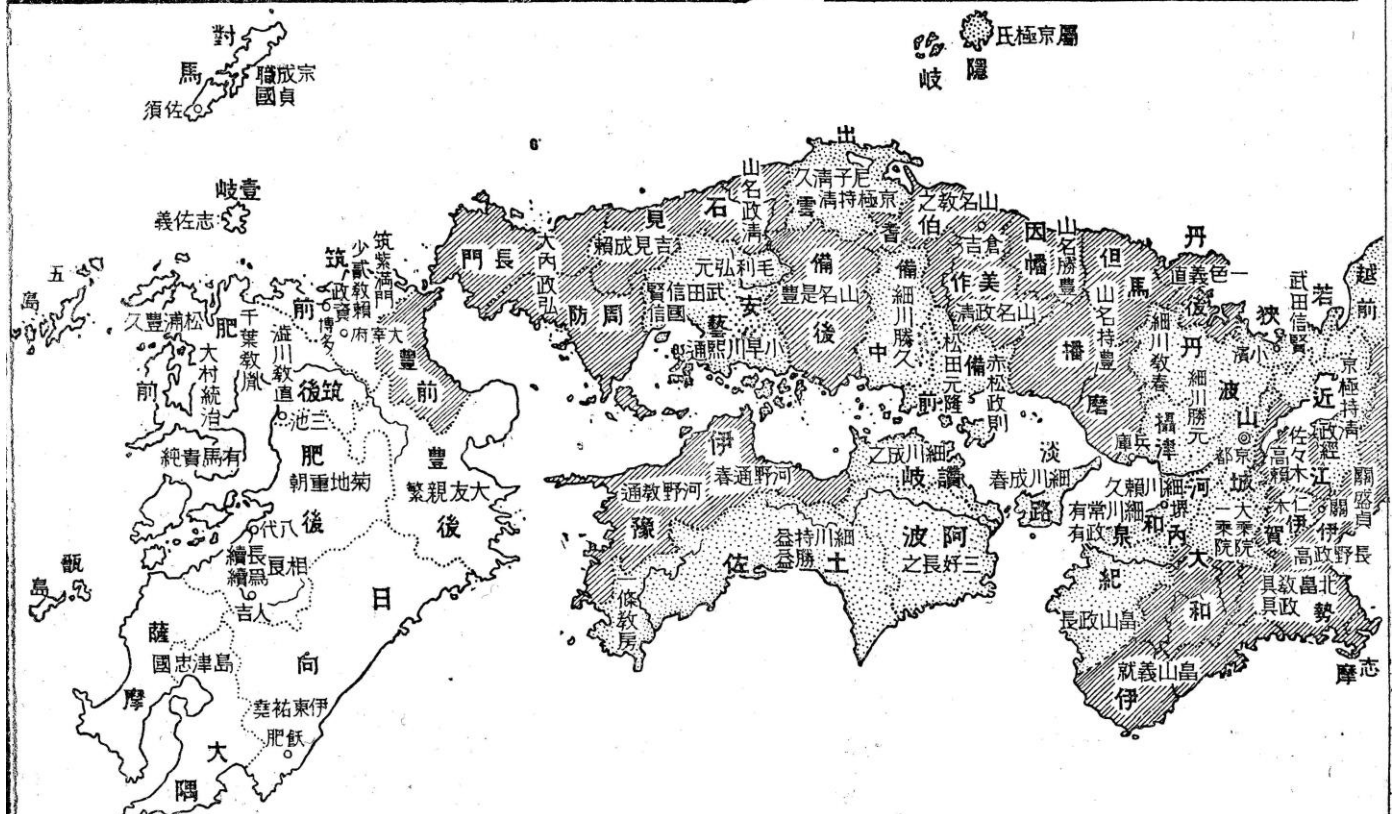
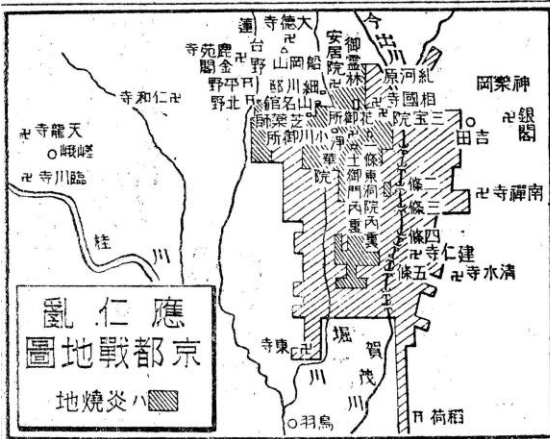
#### 山名方の兵は十一万

これに対して、山名方は、宗全の領国である但馬、播磨、備後の兵30,000を始めとして、同族教之の伯耆、備前の兵5,000、同勝豊の因幡の兵3,000、同政清の美作、石見の兵3,000、一色義直の丹後、伊勢、土佐の兵5,000、土岐成頼の美濃の兵8,000、六角高頼の近江の兵5,000、斯波義廉の越前、尾張の兵10,000、畠山義就の大和、河内、紀伊の兵7,000、同義統の能登の兵3,000、および同心の輩10,000人を加えて、合計凡そ90,000人の外に、周防、長門、豊前、石見、安芸を領国としている大内政弘、および伊予の河野道春がその身方で、これも加えると、凡そ110,000人でした。

細川方は幕府の東に陣し、山名方は西に陣したので、前者を東軍と言ひ、後者を西軍と言った。今、京都市上京区に在る、絹織物の産地として有名な西陣の地は、すなわち、この時、西軍の陣地のあったところです。

#### 全国の大動乱

それでは皆さん、試しに振り返って、この大軍の出て来た国々の名を見て下さい。東は遠江、信濃、越後の一線を境として、その西から、西は中国、四国、九州の豊前までが、ことごとくこの大乱に参加しているのが分かるでしょう。関東の諸国がこれに関係しなかったのは、この地の諸将の間に別に勢力の対立があって、遠く京都に兵を出す余裕がなかったためです。すなわち、上下2,000有余年を通じて、未だ嘗て見る事の出来ないといわれる応仁の大乱は、関東、東北及び九州を除いた諸国の武士らが、いわれもない権臣の勢力争いのために動員されて、桓武天皇以来の帝都を空しく戦塵の巷と化してしまつた戦いであつたのです。



## 第4話 応仁の乱

### さいしよ しがいせん 最初の市街戦

さて、こして何十万という大兵が京都の市中に集まって来たのは、応仁元年4月の頃でしたが、それでもなおしばらくの間は、どちらからも手を出さずに、睨み合っていた。互いに戦わずして先づ自分のほうの形勢を有利に導こうとしていたのです。

しかし、5月に入ると、両軍ともにそろそろ準備が整ったので、とうとうその26日に戦いの火蓋を切った。幕府のある室町の花の御所のすぐ後ろのところに、西軍の一色義直の邸があったのを、東軍の1隊が攻めて、先づこれを占領したのが、はじめです。

この時の戦いは、引き続いて4昼夜に渡ったということです。もとより市街戦のことですから、両軍共に火を諸方に放って戦ったので、市街はいたるところで煙を以って充たされて、多くの仏寺、社殿をはじめ、貴族の邸宅なども忽ちのうちに焼け失せた。路傍に死傷者が散乱して、目も当てられない惨状を呈したことなどは、勿論、言うまでもないでしょう。

### とうぐん しょうぐん ほう 東軍が将軍を奉じる

この時、細川勝元は、戦いが始まると共に、逸早く幕府に伺候して、将軍義政に山名宗全の追討を強制した。義政はよんどころなく弟の義視に宗全の追討を命じ、ついで旗を勝元に授けたので、これより東軍は、名分上は明らかに将軍義政及び義視を奉じることになって、一層氣勢をあげた。西軍はこれに反して、開戦の始めにやや油断したところがあった上に、兵力の上からいっても遥かに東軍に劣っていたので、初めのうちの戦争は頗る形勢が悪かった。

そこで西軍の山名宗全は、急いで更に領国の兵を召したが、この時、彼の身方である大内政弘もまた兵20,000を率いて周防の山口を出発して、途中の河野通春の兵2,000余と合流して東上した。8月のはじめに彼等が京都に着くと、ここに西軍は大いに勢いが振るったので、山名宗全はこの優勢な兵を得れば細川勝元を破ることなど何でも無いと言って喜んだ。

### とうぐん てんのう じょうこう ぼくふ むか 東軍が天皇および上皇を幕府にお迎えする

一方、細川勝元は、すでに幕府を自分の勢力のうちに収めていたので、更に朝廷に奏して山名宗全追討の綸旨を賜ろうとした。宗全を反逆者として討とうと企てたのです。しかし元来、宗全が兵を起こした理由の1つは、義政の夫人富子が生んだ子に将軍職を継がせたいという考えから密かに宗全に頼んだことなので、富子は宗全追討の綸旨が下るのを喜ばなかった。それで、その兄日野勝光と共に百方尽くして義政を説いてこの妨害を試みたので、ついに追討の綸旨は下らなかつた。

しかし、そうこうしている間に、西軍が皇居を襲って天皇を奉じて幕府を征伐する企てがあるという噂が立ったので、東軍の勝元は、西軍に乗ぜられる事を恐れ、にわかには山政長を参内させて、後土御門天皇及び後花園上皇を幕府にお迎えした。応仁元年8月23日の事です。かくして行在所が幕府の内に設けられると、東軍はこれをお護り申し上げることになったので、これより後は東軍を官軍といい、西軍を賊軍と言った。

## 第4話 応仁の乱

### せいぐん ゆうせい 西軍が優勢となる

けれども、実際の勢いを言うと、大内政弘及び河野通春の新手が加わってからは、西軍のほう遥かに振るったので、その後の戦いには東軍がしばしば負けて、日に日にその勢いが衰えた。こうして9月の末には、東軍は僅かに相国寺と勝元の邸と幕府を保つだけとなったために、しきりに諸将の領国に向って、援軍を催促する一方、これ以上には敵を進ませないとして専ら防御の策を講じていた。

### しょうこくじ たたか 相国寺の戦い

しかし、そのころ、京都の市街はすでに兵火のために、多くは焼け野となって、大兵を動かすには殊に都合が良かったので、西軍はこの際一挙に相国寺を奪って、一層東軍の勢いを弱めようと、10月3日、畠山義就、同義統、大内政弘、一色義直、土岐成頼、六角高頼らの諸将は、挙って相国寺に攻め寄せた。勝元の武将安富元綱、長野弥次郎らがこれを守っていたが、たまたま寺内の1悪僧が、西軍に内通して、火を寺に放ったために、伽藍は焼けて、燄が高く天にのぼった。

この時に乗じて西軍が一斉に進撃して来たので、寺内は忽ち修羅の巷と化した、東軍はここでこそ食い止めようと死力を尽くして戦い、西軍はまたここをこそ破って全局の勝利を得ようとして奮闘した。夜の明け方から夕方まで10数時間を戦って、ついに勝敗がつかずに、両軍共に疲れて引きあげた。

この日、死骸は一路の路上に幾千、幾万といなく横たわったが、中でも政弘及び成頼の軍で討ち取った首は、車8輛に積んで引き取って、なお余ったのは空堀に棄てたということです。いかに激戦であったかが想像されます。

### じきゅうせん うつ 持久戦に移る

この相国寺の戦いの後は、両軍ともに持久の策を定めて相対陣しているうちに、応仁元年は暮れた。しかし年があけて2年になると、忽ちまた元日早々から戦いが始まった。けれども、この時もまた互角の勢いで勝敗が決しなかつたので、その後は両軍共に競って防護工事を施して、いよいよますます持久の策を立てた。

宗全が陣中に7丈弱(21m)の高楼を設けて、東軍の陣営を眼下に見下ろすようにすると、同じく西軍の大内政弘もまた高楼を鹿苑寺の東南に建てて、敵陣の模様を偵察するようにしたということです。しかし10月3日の相国寺の戦いの時でさえ、すでに京都の市街はたびたびの兵火に全く荒野と化して、僅かに皇居および室町御所などが、まばらに散在しているに過ぎなかつたという事ですから、これらの物見の上から、かなり遠くまで、何物にも遮られずに見渡せたことだったでしょう。

また、両軍の間には、巾約6m、深さ約3mの大塹壕が掘られ、その境界を嚴重にして、互いに容易に犯すことは出来ないようにしたということです。

### せんせん しがい の 戦線が市外に延びる

こうして持久戦に移ってからは、両軍の間に目覚ましい合戦は無く、時々小競り合いがあるばかりでしたが、それと同時に、これまでは市街戦のみ行われていたのが、しだいに四方の市外へと戦線が延びて行っ

#### 第4話 応仁の乱

た。というのは、両軍ともに、地方から来る敵の援軍を防ごうとしたからです。例えば、西軍が丹波口に兵を出して、東軍の交通を遮ろうとすれば、東軍は山科方面に兵を出して、西軍の糧道を絶とうと企てるといったたぐいです。

#### 足利義視の立場

ところで、ここで1つ、いかにこの乱が無意味な戦いであったかを知るために、皆さんの注意を喚んでおきたい事があります。いやいや、あるいは既に皆さんのほうで気づいているかも知れない。それは、この乱のそもそもの起こりが、將軍家の家督争いをその原因の1つとしていたと言ったにもかかわらず、この乱が起こると同時に、当然敵と身方とに別れるべき筈の義視と義尚とが、將軍義政と共に勝元の東軍に奉ぜられていることです。

管領家の畠山氏と斯波氏の人々は、かっきりと両軍にわかれて属しているので、これは態度があきらかですが、義視と義尚とのほうは、一緒にいたのでは一向に理屈が合わない。これでは何のために勝元と宗全とが争っているのか、分からない形もあるのです。

幕府に在って殊にこれを心苦しく思ったのは義視でした。彼は兄の將軍義政が自分に対する約束から、間にはさまれて困っているのを見ると、いっそ自分独りがいさぎよく身をひいたならば、將軍家の家督問題だけは何の苦もなく収まるだろうと思った。それで、応仁元年8月23日の夜、細川勝元が天皇及び上皇を幕府にお迎え申した時の混雑にまぎれて、ひそかに幕府を脱出して、遠く伊勢の国司畠山教具を頼って行った。

#### 將軍義政の立場

しかしこうなると、今度は義政のほうの義理が立たない。ともかくも一旦固く誓って世継に立てた手前もあるし、殊に執事の勝元に対してもそのままにしておくわけに行かなかったのも、義政はその後しばしば書面を義視に送って、帰ってくるようにと促した。義視は容易にこれに応じなかったが、ついに後花園上皇が特に勅書を賜い、細川勝元、畠山政長、赤松政則らの諸将が連署して帰京を懇請するに及んで、始めて京都に帰って来た。応仁2年9月22日の事です。

ところが、いよいよ義視が東軍の陣営に入ると、今度は義政の夫人富子を始め、義尚党の者らがしきりに義政に迫って、義視を排斥するようにした。すると、もともと優柔不断な、平気で出たらめな事ばかりをしているような將軍義政は、忽ちその気になって弟義視を疎んじ出した。なんという頼りのない將軍だったでしょう！

#### 細川勝元の立場

ところで、本来から言えば、ここで東軍の細川勝元が義視を奉じて立つべきところですが、しかし將軍義政の本心は、はじめから寧ろ西軍のほうへ傾いていたのであるし、もしも勝元がここで義視を奉じて立てば、恐らくあべこべに勝元のほうが逆臣とされただろう。さすがに勝元も、背に腹は替えられなかったのも、よんどころなく義視にすすめて剃髪させようとした。それで、義視は東軍にとどまることが出来なくなっ



## 第4話 応仁の乱

ひえいざん  
て比叡山にのぼった。

### 山名宗全の立場

ところが、一方、この時の山名宗全の西軍は、すでに天皇をも将軍をも東軍に擁せられて、自分のほうは賊軍の名さえ被らされて非常に損な立場に置かれているところでしたから、今、義視が比叡山にのぼったということを聞くと、この機会を逸してはとばかりに、宗全は急いで兵をやって義視を迎えて、奉じて西軍の主将とした。時に応仁2年11月25日でした。

### 可笑しな成り行き

成り行きとは言え、何という可笑しなことだったでしょう！ 今や彼等の争いは、当初の趣意とは全く正反対になってしまっている。将軍義政の夫人の富子に頼まれて、義尚を守り立てようとした山名宗全が敵の義視を擁して、義視の執事である細川勝元が却って義尚に荷担しているのです。これを見ても、いかに彼等が主義や節操を無視して、ただ権力の争いに汲々としていたかがわかります。

### 将軍義政と義視の戦いとなる

さて、こうして義視が西軍に奉ぜられると、細川、山名の戦いは変じて、将軍義政と義視の戦いの如くになった。勿論、実力の上からいえば、細川勝元の1党と山名宗全の1党との争いに変わりはないのですが、形の上から見れば、将軍義政を奉じる軍と弟義視を奉じる軍との対抗となり、明らかに兄弟で相争う姿となったのです。

そこで、義政は朝廷に奏して、ついに12月5日に、義視の官職を削り、追討の勅を賜った。すなわち義政も今やはっきりと義視を敵と見なしたのです。そして、翌応仁3年（5月28日に改元して文明元年となる）正月8日には、ついに子の義尚を立てて跡嗣と定めた。義尚は時に5才でした。

### 争いは諸将の諸国に移る

こうして両軍の対抗は、その後もなお続いていたが、しかし、京都市内にはもう目ざましい戦いもなく、両軍互いに乗ずべき機会を伺いながら、ただ睨み合っていた。勿論、市外のほうでは、時々小衝突が繰り返されたが、それも後には遠く諸将の領国のほうにと移って行った。

対峙したままで文明元年も暮れ、同じく2年も、3年もまた大した事も無く過ぎていくと、諸将の中にはすでに自分の領国の騒乱を鎮めるために帰国してしまった者などもあって、同じく4年の初めの頃には、在京の将士は皆戦いに倦んで、和睦を望む者が多かった。

### 将士、みな戦いに倦む

この応仁の乱が始まってからでも既に6年であるのに、京都の市街は、ずっとその以前から、畠山氏や斯波氏の争いで、物騒な状態の中に置かれていたのです。一般の市民の大迷惑は言うまでもないことです。が、権力を欲して空しく争った者たちなども、今は早く平和にかえって安堵の暮らしをしたいと望んだでしょう。誠に自然の人情です。

## 第4話 応仁の乱

あかまつまさのり たちば  
赤松政則の立場

山名宗全も、細川勝元もまた、共にこの形勢を察したので、思いきって和睦をしようとする、諸将もまた多くは賛成したが、独り東軍の赤松政則だけが断固として反対した。彼はこの大乱中に、備前、美作、播磨のほうで山名氏の領地を多く占領したので、和睦すれば、それを返さなければならぬ事になるであろうと思ったからです。当時、赤松政則は、細川勝元・畠山政長と共に東軍中の主力でしたし、且つ勝元とは姻戚の間柄でもあったりするので、勝元も其の言い分を無下にしりぞけてまで和睦をするわけにも行かなかったのです。

それで、和議はそのまま中止となったが、この時、勝元は自分の思うようにならないのを恥ぢて、髻を切って坊さんになろうとしたと伝えられ、宗全はまた、切腹しようとして、近侍の者に取留められたと伝えられています。

りょうぐん しゅしょう し  
両軍の主将の死

両軍の主将が既にこうして和睦を欲している以上、めざましい戦争などが有りよう筈がなかった。その後、いよいよますます気が抜けたように、両軍はただ睨み合っているだけでしたが、越えては8月になると、山名宗全は年が寄ったからと言って、自分は軍務から身を退いて、子の政豊を代わりとした。けれども、身体はその後は再びもとのように健康にはならなかったと見え、ついに翌文明5年3月19日に陣中で没した。年は70才でした。

すると、間もなくその5月22日に東軍の大將細川勝元も、病死した。年は44才でした。戦いを始めてから既に7年、互いに何も得るところも無く、ただ京都および殆ど全国にわたった諸将の領国を疲弊させたばかりであったので、両人共に腹の中ではさぞ後悔しながら死んで行ったことだったでしょう。

さて、両軍共に主将は死んだが、それで戦いが終わったかという、そうではなかった。その対抗はやはりつづいていた。東軍は、細川勝元の子の政元が幼少でしたので、1族の細川政国が主として采配を揮り、西軍は畠山義就と大内政弘とが中心となって足利義視を奉じていた。

よしひさ しょうぐん  
義尚が将軍となる

ところが、そうこうするうち、将軍義政は将軍職を退いて子の義尚に後を譲ったので、将軍家の家督問題は、実際の上できまりがつかしました。それで、翌6年の2月になると、またまた和議が起こったが、今度もまた東軍の赤松政則と西軍の畠山義就とが、おのおのその領国の関係で反対したので、成立しなかった。

しょうしょう りょうごく ひ あ  
諸将は領国に引き上げる

とはいえ、この頃にはもう諸将の領国のほうで起こった戦乱が、ますます烈しくなりかけて来ていたので、誰も彼もがいつまでも京都にぐずぐずしてはいられなかった。文明7年の11月に、西軍の斯波義廉が尾張へ帰ると、西軍の諸将の中には、東軍に降る者なども次第に出てきて、ついに同9年9月には畠山義就も河内に帰り、その11月には大内政弘も周防に引き上げた。こうして西軍の主力が京都を去ってしまうと、

#### 第4話 応仁の乱

よしみ と きなりより とも ひ あ  
義視もまた土岐成頼と共に引き上げた。

西軍が解散すると、東軍の諸将もまたそれぞれ兵を率いて領国に帰ったので、ここに始めて京都の戦乱は止んだ。 実に応仁元年に始まってから11年の後です。 世にこれを応仁の乱というのですが、何らの意味もない戦いであったことは、以上に述べた通りで、その結末もまた、何が何やら、うやむやに終わったのであります。

#### 京都の荒廃

さて、戦争は終わったが、あとの京都の有様がいかにみじめなものでしたかは容易に想像されるでしょう。 幕府をはじめ、神社、仏閣、公卿や将士の邸宅も、一般の民家も、その大部分は焼き払われてしまったので、花の都の面影はどこにもうかがえなかった。 戦争が始まると同時に逃げ出した市民も、やっと安心してぼつぼつ帰って来たが、見渡すかぎり一面にぼうぼうと草の生い茂った荒れ野とかわった姿を見ては、誰か涙を流さずにいられたでしょう。 当時、幕府の書記を務めていた飯尾彦六左衛門という人が、  
汝や知る都は野べの夕雲雀 あがるを見ても落つる涙は

と歌っていますが、これを見てもその実況の一端はうかがえます。 況して、昔からの貴重な記録や宝物なども、いかに多く焼け失せたかを考えると、実にこの11年にわたった大乱の与えた損害は、想像さえ出来ないでしょう。 しかも、それもこれも、もとはといえば皆、将軍義政の無責任な悪政の結果なのです。

#### 応仁の乱は戦国時代の序曲

ところで、もうひとつ、ついでに皆さんの注意を促しておきたい事があります。 それは、京都において東西両軍は解散したが、しかし、両軍に属した諸将の多くは和睦したわけではなかったで、心からその対抗の気持ちを棄てたのでは無かったという事です。 それで、彼等はその領国に帰ると、おのおのその勢力を養って、次の機会の来るのを待っていた。 ところが、翌文明10年の8月に、義政と義視の間の和睦も成立したので、もはや諸将が再び京都にのぼる必要はなくなったが、しかし、その後も領国にあっては、おのおの対抗を続けていました。 これが後の群雄割拠の「戦国時代」を現出することになったもとです。 いわば、応仁の乱は京都で燃えつづいた11年の大火でして、その火が全国に飛び火して、ついに爾来100年にわたった戦国時代の大火災となったのであります。

( 第4話 応仁の乱 終わり。 次は前頁に戻り、 第5話 室町時代の文化 へ)